

特集

保育現場で**気**になるコトバ考3

「子どもの最善の利益」って何だ？

「安心」という言葉を知らないぐらい

安心の中で生きる」と

青木 悦

(教育ジャーナリスト)

子どものころから、元軍人だった父親に殴られたり蹴^けられたりしながら育ちました。つらいのは、幼いころの家族の記憶がほとんど無いこと。近くの四十十川で遊んだ友達との思い出はあっても家庭の中では恐怖の思い出しかないこと。中学生の時、母に「お願いだからお父さんと別れてください。一晩でいいんです、静かにゆっくり夕ご飯を食べたいのです」と手紙を書きました。夕飯の時、父が居ると、うっかり妹と冗談を言って笑い合っても殴られました。「おれをバカにした」と。父が居なくても、「いつ帰ってくるかわからない」と足音におびえて急いで食べました。「静かにゆっくり食事したい」という言葉の裏にはそういう事実がありました。

母はため息をついて、「別れたいのはやまやまだけど、結婚や就職の時、あなたたちが不利に

青木 悦 (あおきえつ)

1946年高知県生まれ。大学卒業後「朝日中学生新聞」「婦人民主新聞」記者を経てフリーに。ずっと教育関係のことを取材してきた。2012年、大震災後の福島市に転居し、そこから全国に講演等に出かけている。

なるから離婚はできない」と言いました。私たちのせいで母は不幸に耐えている、母を不幸にしたのは自分たちだ、そう思っ、母に申し訳ないという人生を歩き始めたのはこのころからです。いわば、典型的なDV家庭の長女としての私の出発でした。幼いころ、事情を知る人は「かわいそうな子らや」と言いました。「ただ普通に落ち着いてご飯を食べたい」という子どもの願いは、その切実さは、母を含め、どの大人にも通じませんでした。日常を静かに過ごしたいと子どもが願うなんて、確かに異様なことです。でも事実でした。

子どもの願いは大人には伝わらないのだと思っていました。そして自分がいい年齢になって、新聞記者として、子どもの「いじめ」や「事件」や「家庭内暴力」などの取材をするようになってからも、この事件のこの子のその時の気持ちは私にはわからないだろう、しかし、大人にはわからないと思っ、この子のそのその気持ちはわかる気がする、そんな妙な感情で取材に歩いていました。さらに自分が親になっ、私はわが子の気持を探ろうとは思いませんでした。わからないだろうと思っ、いたからです。

子どもの思いを理解しようとか、子どもの心に寄り添っ、などの言葉が使われますが、私自身はそういう言葉を使っ、ことはありません。シラジラとした気分になるからです。そういう自分を、まだ大人になっ、いないのかしらと思っ、こともありません。

だから簡単に「子どもの最善の利益」と言われても答えられません。ただ、長い年月取材を続けている間に、「子どもの最善の利益」と信じて、少しズレたところで考える大人には出会っ、てきました。

例えば「子どものため」という言葉。「あなたの人生にプラスになる、あなたのためよ」と言っながら、虐待といっ、てもいいようなやり方で長時間勉強させる親、死ぬほどの暴力を加えな

から試合に勝たせようとするスポーツの指導者、その子は気を遣っているだけなのに「いつどこで会ってもにっこりあいさつしてくれるいい子」と言ってはばからない地域の人たち、これら全部に対応して生きてきた子どもが、大人と言われる年齢になってから、まるで社会に復讐するかのような事件を起こすことが多いと、私は思いました。99年、山口県の下関駅に車で突っ込み、刃物を振り回して五人の命を奪った35才の男性、08年、東京秋葉原で同様の事件を起こし七人の命を奪った25才の男性、どちらも県下一と言われる偏差値の高校を卒業しています。

私はこれを「幻の子ども像」と呼び、良かれと思つて子どもにも過剰な期待を寄せる大人に、「幻の子ども像」を追っていませんか？ 子どもを苦しめるだけです」と語ってきました。

また、幼い子どもを育てている若い親たちに「しつけ強迫症候群」が強いことも知りました。早期に「しつけ」なければ大変なことになると思い込まされた人たちが、幼い子どもをたたいて、一発で黙らせようとしています。私は「しつけ」とは、社会で生きるための技術を伝えることであつて、暴力とは無関係のものだ」と言ってきました。ここにもまた「この子のため」という、大人の言い訳がたくさん用意されていました。

「子どものため」と言いながら、子どもをわかつていないことを理解しない大人たちがいかに多いことか。中でも多くの母親が悩む「愛情不足」という言葉。訳のわからない「愛情」の基準を問うてくる母親は少なくありません。

先日も、ある集まりで、母親の愛情つて何だろうか？ という話になりました。「無条件で受けとめる」「ただ抱きしめる」「心を込めて子の話を聞く」などといった話題になっていました。話し合いも終わろうとするころのことです。一人の外国籍の女性が言いました。少したどたどしい日本語で、私に向かって、はっきりした、真剣な問い方でした。「青木先生、日本の人はよ

く無償の愛という言葉を使います。具体的に、無償の愛って、何ですか？」——

私はその勢いにのまれる感じで、思わず口にしておりました。「親の、子への無償の愛とは、衣・食・住だと思えます」。その人の目に見る見る涙があふれました。そして、「よくわかりました。ありがとうございます」と深くお辞儀をして部屋を出ていかれました。私の答えでよかったのかどうかわかりません。その人の足どりを見ていて、何かしら納得することがあったのかもしれないと思えました。

何よりこの質問によって、また、深く考えもしないで自分の口から出た答えによって、私自身を考えさせられました。そう、私たち母親は、子どもが必要としているものが何なのかを見失っているのではないかと。家もあり、着る物もあり、食べ物もある、それ以上に何かを「与える」のが子育てであり教育だと、いつの間にか思い込まされていたのではないのでしょうか。

子どものためと信じて子どもを追い詰める「幻の子ども像」、あなたのためよと言いながら実は自分のイライラをぶつけるだけの「しつけ」、そして実体がかめないまま悩む「無償の愛」。この三十数年間、子どもの回りを取材し続けてわかったことは、「人として」ではなく経済的な損得勘定で子どもを「作ろう」としてきた大人の傲り（おごり）という事実でした。

真に「子どもの最善の利益」を考えるなら、子どもが自らの意志でゆつくり遊び、学び、考える力を身につけられる時間と場所を保障することだと私は思います。もちろん、後ろに危険や不安を感じることもなくということ、つまり「安心」という言葉を知らないくらい安心の中で生きられるようにすることです。そのためには大人がもう少し謙虚にならなければ、つまり「育てよう」「教育しよう」と思い過ぎないようにしなければ、子どもの「最善」は見えてこないのではないかと思っています。